

インドネシアでの
サービスラーニングを終えて
～ディスクでつながるすばらしさ～



国際基督教大学 2年 山上莉奈

1. はじめに

私は 2015 年 6 月 25 日から 7 月 14 日まで、インドネシアの Petra Christian University 主催の Community Outreach Program (COP) に、大学の「サービスマーケティング」の授業の一環で参加してきました。「サービスマーケティング」とは、ボランティアなどの社会貢献活動を大学での学びにつなげるプログラムです。この COP では、インドネシア・アメリカ・オランダ・韓国・香港・台湾・日本から約 150 名の学生が集い、6 カ所の村に分かれて地域支援活動を行います。

昨年このプログラムに参加した牛込麻依さんが、ドッチビー普及活動をされたというお話を聞き興味を持ちました。ICU の「サービスマーケティング」の派遣先はインドネシアだけではありません。インドネシアのプログラムに参加することに決めた理由はいくつかありますが、その中のひとつはドッチビーの活動を引き継ぎたいという思いがあったからです。牛込さんは、1 年後に COP に参加した後輩から報告を受けて初めてこのプロジェクトが終わると聞いていました。私は牛込さんと同じ国際基督教大学フライングディスク部 WINDS に所属しており、同じ部活の後輩としてこの目でそれを見て報告したいという思いもあり、参加を決めました。

"Terima Kasih" これはインドネシア語で「ありがとう」という意味の言葉です。インドネシアの子供たちから何度この言葉をもらったでしょう。インドネシアで過ごした日々は忘れられないものとなりました。このレポートでは、そんなサービスマーケティング活動の中で行ったドッチビーでの交流について報告したいと思います。

2. 現地での活動

結局私が派遣された村は牛込さんが訪れた村とは違い、また一からのスタートでした。そして、牛込さんと同じ村を訪れた仲間からの報告では、そこで昨年のドッチビーで遊んでいる子供たちは見かけなかったそうです。私もそれを聞いてショックを受けましたが、また違う村にドッチビーをもっていき、それを使って多くの人と交流できたことはとてもよかったと感じています。

インドネシアでの活動は、ドッチビーがメインであったわけではありません。各国の学生と協力しながら、水をきれいにする water purifier や公衆トイレを作ったり、子供たちに歌や工作

を教えたり様々な活動をしました。しかし、空いている時間があれば、いつも子供たちとディスクで遊んでいました。私が常にディスクを持ち歩いているので、私を見つけると子供たちはいつもディスクを投げるジェスチャーで、一緒に投げるように要求してくれました。

また、活動の中で”Carnival”という、ミニゲームのブースをいくつか作り現地の子供たちに楽しんでもらう企画があったのですが、そこでドッチビーを使ったゲームをいくつか提案し、そのうちの2つを実際にやることになりました。ストラックアウトと、2人組でのキャッチ&スローをしたのですが、ディスクがたくさんないとできなかったことで、持って行ったドッチビーが大変役立ちました。

最後の日には、幼稚園と小学校に1枚ずつ、あとは子供たちに、もっていったディスクすべてをあげてきたのですが、みんなで取り合いになっていて、とても心苦しかったと同時にそんな取り合いになるほどディスクを楽しんでくれたのだと思うと嬉しかったです。

現地の子供たちにはもちろんですが、一緒に活動していたほかの国のメンバーにも興味を持ってくれる仲間がいて、空き時間に一緒に投げたり、投げ方を教えたりしました。ディスクを通して会話が弾んだりもし、ディスクはよいコミュニケーション手段の一つだと改めて感じました。





3. 感じたこと

毎回遊び終わった後や、ディスクをあげた時、子供たちは”Terima Kasih”と何度も繰り返してくれました。ディスクを通して交流する楽しさを改めて感じました。たとえ言葉が通じなくても、一緒に体を動かすことで、つながることができるって素晴らしいことだと思います。

反省としては、去年の牛込さんの話を聞いていたのにもかかわらず、それとは違う何かができないかと考える時間が長すぎて、実際に動き始めるのが遅かったことです。何をするにしても、余裕をもってしっかり準備することが大切だと思いました。出発前に一度、講習会にも参加させていただき大変お世話になりましたが、それも牛込さんより準備不足であったと反省しています。また提案してくださった、ディスクにメッセージを書いてもっていくという案も、時間の関係で実行に移すことができませんでした。

今年もラマダンにかぶっており、それはどうしようもないことでしたが、ディスクを常に持ち歩けばよかったという牛込さんの去年の反省は生かされたかなと思います。いい報告ができず、とても残念ではありますが、ディスクが残っていなくてもそのときそれで一緒に楽しんだ事実は変わりませんし、私もまた違う村で、ディスクの楽しさを伝えられたことは無駄ではなかったと思います。



4. 最後に

また子供たちに会いに自分の訪れた村、Jabung villageにもう一度行きたいと強く思っているのですが、その時はあげたドッチビーをもっていなくても、またみんなでディスクを投げて楽しめたらなあと思います。ディスクをあげるときに“Terima kasih”と名前を書いてきたので、それが残っていたら本当に嬉しいです。そして、インドネシアだけではなく、これからもディスクの楽しさをいろんな人と共有できたらなあと思います。

急なお願いにも関わらず快くご協力してくださった、日本ドッチビー協会の今井さん、横山さん、渡邊さん、そして代表の稲垣さんには心から感謝しております。本当にありがとうございました。

